

ファミリー・トリップ(ファミトリ)のススメ



ファミリー・トリップ(ファミトリ)のススメ

1.はじめに

今になっては当たり前前の光景になりつつあるが、福岡市ではアジアからの観光客をよく目にする。観光客の国籍別では韓国人が最も多く、福岡空港と博多港の入国外国人のうち70.6%（平成19年）を韓国人が占めている。カップルや学生の旅行客も多いのだが、特に家族旅行を目にする。週末であれば理解できるのだが、平日も多い。

先日、勇気を出して韓国の子どもに「学校はどうしているのか」と聞いてみたところ、学校は「お休み」扱いにならないという。疑問に思い、大学で韓国教育の研究をしている友人にその真意を確認すべく連絡をしたが、そのようなことは聞いたことがないとの回答。しかし、各学校長の権限で認めている場合や韓国では学校よりも塾や家庭教師による勉強を重視する風潮があるため、子どもが学校を休むことに親が抵抗がないとではとアドバイスを頂いた。

日本社会の場合、社会人は確かに以前と比較して平日に休暇を取りやすくなった。しかし、学生である子どもにとって、平日に体調不良等以外で休暇を取ることは勇気のいることである。

日本人一人あたりの年間旅行宿泊数は、わずか3.5泊、その中で、「家族旅行」の占める比率は4割弱程度に過ぎないという現状である。（欧州諸国においては、年間宿泊数がイギリスでは20.2泊、ドイツでは20.1泊、フランスでは15.8泊で、そのほとんどが家族主体とのこと。）また、一般的に旅行代金は平日と比較して、長期休暇中や週末は非常に高いことが多い。経済的にも家族旅行は一般の家族にとって容易いものではないことが分かる。

わたしは学校教育や会社において、この家族旅行(ファミリートリップ：以下「ファミトリ」)を教育委員会や学校長の裁量によって制度化し、学校のカリキュラムに取り入れることで、社会が抱える様々な問題が解決できるのではと考えた。

2.解決できる事項

① ファミトリを行うことで、「家族の絆が深まります」

→離婚の増加や家族形成の崩壊が問題視されたアメリカやフランスなどでは、育児、介護、こどもの社会性の育成、コミュニティーの核、精神的安らぎ、集いや楽しさなど、家族のもつ基本的機能を見直す動きがあるようである。日本においても時代や社会環境によって各世代の価値観に不調和音が生じ始めている。家族のもつ基本的機能とは知識だけでは理解できるものではなく、同じ時間と経験を共有し「対話」することで高めていけるのではないか。

また、幼児期の家族旅行や自然体験が将来の職業選択や家族形成に大きな影響を及ぼ

すことを、私たちは自らの経験的を通して実感している。

② ファミトリを行うことで、「国際感覚が身につきます」

→ある程度まとまった長期休暇が取れると、年少期から（アジアを含めた）海外に行くことが可能になる。海外に気楽に行けることにより、国際感覚が豊かになる。外国語の必要性を実感し、外国語学習についての向上心が芽生えることで外国語へのストレスがなくなるのではないか。「九州の道州制化」には「九州の国際化」が必要不可欠である。子どもの意識が変わることは、国際化への近道であると言っても過言ではない。また、自分で考え、それを「実現」する力が、経験を通して身につくと考える。

③ ファミトリを行うことで、「経済波及効果が見込めます」

→社内旅行や友人との旅行の方が（いわゆる財布がたくさんあるため）比較的に旅行費の単価が高い。ファミトリの場合、財布がひとつであるため結果的に財布の紐がかたくなりがちである。

以上のような費用面の問題と家族個々の価値観の多様性から既存の観光にとどまらず、地域の農業、水産業、情報サービス業、学習、観察、体験、さらには祭りやイベントなど、新しいプログラムづくりに関わる多様な主体の関与や協力が不可欠となる。そのため、長期的には地域の多様な産業や文化の創造、そして雇用の創出に大きく寄与できるのではないか。

3.どのように行うのか(実施の流れ)

①ファミトリを実施。

「休み」扱いにはありません。学校のカリキュラムとする。



②「思い出ノート」の作成

子どもが各自作成、教師に提出する。



③「思い出ノート」の分析

(学校の教師確認後) 教育や観光に関する行政や研究機関にて
子どもや家族の視点を分析



④フィードバック

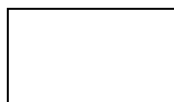
(教育機関) 子どもの深層心理の分析し、今後の教育方法のあり方を検討
(観光関連) 既成の概念にとらわれない、潜在的な可能性を秘めた観光や産業の検討



4. 「思い出ノート」とは

ファミトリを実施後、子どもや家族に「思い出ノート」の作成を行います。

写真やコメントを記入



1	 ジャンプきょうそう お兄ちゃんとジャンプの競争をした。 僕のほうがじょうずだった。	2	 お花畑 お兄ちゃんとジャンプの競争をした。 僕のほうがじょうずだった。	3	 とりがいたなべ お兄ちゃんとジャンプの競争をした。 僕のほうがじょうずだった。	思い出ノート 夢アイデア小学校 3年2組 愛出亜 太郎 担任 旅の行程 2011.9.23 沖縄へ出発 9.24 うみで遊ぶ 9.25 買い物へいく 9.24 家にかえる
4	 かっこいい電車 お兄ちゃんとジャンプの競争をした。 僕のほうがじょうずだった。	5	 タワーの下 お兄ちゃんとジャンプの競争をした。 僕のほうがじょうずだった。	6	 よるのまち お兄ちゃんとジャンプの競争をした。 僕のほうがじょうずだった。	
7	 きれいな海 お兄ちゃんとジャンプの競争をした。 僕のほうがじょうずだった。	8	 水族館にいきました お兄ちゃんとジャンプの競争をした。 僕のほうがじょうずだった。	9	 電車でかえりました お兄ちゃんとジャンプの競争をした。 僕のほうがじょうずだった。	

行政や研究機関の記入欄



5.まとめ

私には小学生の2人の子どもがいる。小学校6年生の長女と1年生の長男である。最近、長女の言動が気になってきた。これが思春期の初期なのであろうか。恋愛の話やテレビに写るアイドルの話ばかり。(まだ自分では若いと思っているので) 近頃の若い人は、という一言で済ませたくはないが、確かにジェネレーションギャップを感じる。

旅は物事を多角的に見ることできる貴重な機会である。学生の頃、リュックひとつで欧米を旅したことが非常に懐かしい。はじめて出会った人々と偉そうに母国日本のことを語り、夜を明かした。違う立場に立って、改めて自分を客観的に見ることができる。

今回「ファミトリのススメ」ということで家族旅行の提案をしたが、勇気を出せば家族旅行くらいは行ける。しかし、本提案は家族旅行を通して、九州の抱える社会・経済の問題点を解決できればという主旨で提案した。実際には様々な制度や慣習を乗り越える必要があると考えるが、私の子どもたちが私のような大人になる前に実現して頂きたい。

※参考文献

- ・福岡市「平成19年福岡市観光統計」
- ・平成19年 福岡市「福岡市観光に関するデータ集」
- ・「家族仕様」の旅文化を拓く 平成16年6月 長期家族旅行国民推進会議